❖民族のこころ(152)❖

ケニア・ルオ村落で迎えた年末年始

椎野 若菜

クリスマス・イブの夜，教会の長椅子で眠る人々。

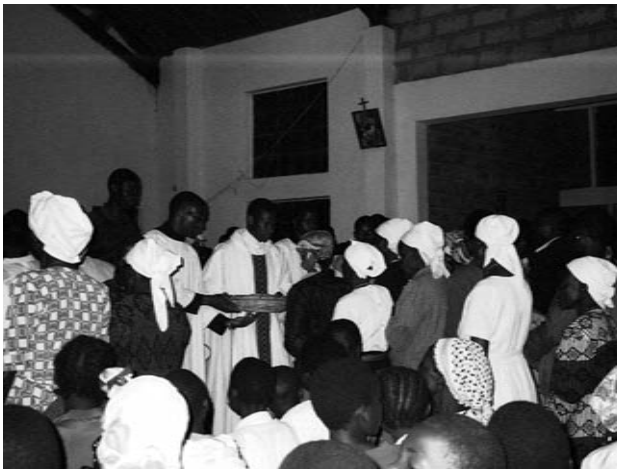
人類学者なら多くの人が，自分のフィールドに何ヵ月も滞在しているうちに，年末年始を迎えたことがあるものだろう。私も何度か，赤道直下のアフリカ大陸，ケニアのヴィクトリア湖畔のフィールドですごした。日本の冬とは真反対のあついあつい太陽をみあげて,「今日ってクリスマスだっけ」と独り言を言ったこともある。いつものように，ルオ人の家族とウガリ（とうもろこしの粉でつくった練り粥）と干し魚の煮物の食事をとってから，ぶらぶらと村を歩きつつ「今日って大晦日なんや」，とつぶやきながら，遠く日本で家族がお雑煮を祝っている様子を思い浮かべたものである。ホストファミリーの親父さんが,「金がないから，クリスマスなのにチキンもチャパティ（インド人がケニアに伝えた小麦粉を使ったパン）も食べられないなあ」とぼやいていたときもあった。そのときは親父さんとその3人の妻，十数人の子どもたち，長男夫婦と子どもたち，親父さんの弟夫婦とその子どもたち，という大所帯のコンパウンドに暮らしていたから，クリスマスや新年の「特別な食べ物」を私の財布から出そうなど予想もつかなかった。村を散歩していたら，ルオランドでは贅沢品であり，私の大好物であるチャパティとグリーングラム（青豆）のスープを「クリスマスだから」とある家でもてなされ，とても美味しかった味が忘れられない。

また暮れになると必ず思い出すのは，カトリック教会でクリスマス・イヴの一夜を明かしたことである。私自身は特定の宗教を信仰しているわけではないが，どんなふうにミサが行われるのか一度みてやろう，と友人のリネットと彼女の乳飲み子と，24日の夜からミロギ教会に行ったのだった。

夜通し過ごすというので，腹ごしらえするために，夕食をお腹いっぱいたくさん食べた。出かける準備をし，赤ん坊を抱くリネットと連れ立って，懐中電灯を照らしながら教会までの夜道を歩いていった。村からは3キロほど離れた丘の上にある教会につづく道に，近隣の村から人びとがあちこちから集まって合流してきた。

ミロギ教会はこのあたりでは最も古いカトリックの教会で，イギリスがケニアを植民地化し始めた間なしの1898年頃にカトリックが入ってきて布教の拠点を建てたのが始まりである。セメントの床，日干し煉瓦の壁をもち，教会の正面の壁にはけっして上手とはいえないキリストと聖母マリアの絵がどうどうと描かれている。この辺りではもっとも立派なこの教会のなかには，私たちが着いたときにはすでに，多くの人びとがいた。長椅子には，人びとが場所とりをしており，ミサが始まるのを待っていた。私たちも，やっと空いているスペースを見つけて座った。

ミサが始まった。ふつうの日曜のミサでは，ドラムの音と聖歌隊の歌声とともに，まず少女たちがダンスをしながら入場するのだが，この日は違った。特別な衣装をまとった司祭が，聖歌隊の歌声に導かれながら，説教師などとともに入場。そして何セッションかのミサが続けられ



左：洗礼をうけた生まれて 3 日目の赤ん坊
右：神父から祝福を受ける人々

た。3 時間ほど続き，真夜中になった頃，しばらくミサはお休みになった。

そこで教会内にいた人びとは帰る組と残る組に別れた。リネットは，「一休みしに家に帰るには遠いし，ここで過ごしましょう」と言った。残る組の回りの人びとは，おのおのが場所をつくりいっせいに椅子のうえで寝始めた。教会内は一時的に，あたかも避難所のようになり，うかうかしていると場所がなくなりそうになった。リネットが「ワカナ，場所はある？大丈夫？ちょっと寝るわよ」と言うので，私も寝るスペースを確保して，長椅子に横になった。リネットはカンガという布（女性がスカートやエプロン，ふろしき，子どもを抱くなど多用途に用いる綿のプリント布）を長椅子と長椅子のあいだの隙間の床に敷き，そこに赤ん坊を寝させ，自分もすぐ横の長椅子に横たわった。大きな教会の建物のなかはろうそくとランプの光に照らされ，妙な静けさに包まれた。こうした寝心地の悪い，硬い長椅子の上で知らぬ間にうとうとしていたら，また物音がし始めて，人びとが少しずつ起きだしてミサが始まった。明け方になって，私が少し寝ている間にまた，新たな参拝者が教会内にぞくぞくと加わってきているようだった。キリスト誕生をお祝いする，クリスマスの早朝のミサが始まった。

やがて，何が始まるかと思いきや，洗礼が始まった。生まれて 1 週間ほどの赤ん坊から，成人したような人たちの洗礼の儀礼。そして，また次に行われたのが，なんと結婚式だった。それも集団結婚式で，集まってきていたのはほとんどはかなりの老齢夫婦だった。どうやら，最近は死ぬ前に教会婚というものをしてみよう，という老人たちが増えたようだ。うやうやしく神父に礼を尽くし，祝福を受けたあとの老人の顔が誇らしげだったのが印象的だった。

やがて朝の 10 時すぎになって，私たちはそろそろ帰ることにした。朝の明るい日の光を受けて，新たに参拝に来る人びととすれ違ったあと，近道の薮のなかを通って帰路についた。「ワカナ，お腹すいたでしょう，子どもたちも待ってるから急いで帰りましょう。帰ったらチャイをつくるわ」リネットは言った。24 日の夜から 25 日の朝にかけての教会で過ごした一夜は，キリストの誕生の前祝い，誕生のお祝いから，最後は村の人びとの洗礼や結婚までお祝いして，盛りだくさんであった。締めくくりが老齢の夫婦たちの結婚式だったので，いったい自分は何の催しにきたんだっけ，と妙な充足感を得ながら，リネットの後をついて薮を掻き分けながら家に戻った。